

## ヨハネ 1 章 1～5 節「光は闇の中に輝く」

私たち教会がクリスマスを祝うことができるのは、救い主イエスを受け入れ、罪から救われ、永遠のいのちに生きているからです。闇に覆われるような中でもまことの光である主イエスに照らされて歩むことができます。その恵みを今日の箇所から教えられます。

### 1. 「ことば」なる方（：1～2）

イエスがこの世に来られたことと、それが人にとってどのようなことであるのかが教えられています。

1 節。「初めにことばがあった」。創世記の冒頭のみことばを思い起こします。「はじめに神が天と地を創造された」。その「はじめに」と関係していると思われます。聖書は、神がこの世界をお造りになったことを語っています。この世界、宇宙が存在する前から神はおられたのです。その「初めにことばがあった」のです。

その「ことば」とは、言語を意味しているわけではありません。2 節以降、1 節の「ことば」を受ける代名詞が「この方」と訳されています。「この方」つまり人格を持った存在として語られています。そのことは 14 節で「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた」と言われていることから明らかです。

「ことばは神とともにあった」。「神とともに」ということは、「ことば」なる方は「神」と区別されています。しかし、「神とともに」という結びつきがあり、親密な交わりがあります。聖書は時間、空間を超えたお方、永遠無限のお方がこの有限の世界に関わっておられると教えています。「ことば」なる方もその神とともに存在した、そして存在し続けていると言います。

そのように「神」と区別されているようでありながら、しかし「ことばは神であった」と言われます。では、「神」がおられ、「ことば」も神であり、神がお二方いるのでしょうか。ヨハネは「ことばは神とともにあった」と書いていて、二つの神ではなく、唯一の神だけがおられることを示しています。

「ことば」なる方は、初めからおられ、神とともにおられ、神である方です。そして、1 章を読み進めて行くと、この「ことば」なる方は、14 節、17 節からイエス・キリストのことであると分かります。ですから、1 節に戻ると、父なる神と神のひとり子であるイエスのことが語られているのです。「ことば」なる方、イエス・キリストは初めからおられる永遠のお方であり、父なる神とは区別されながら父なる神と最も密接に結びついておられ、神ご自身であることが宣言されているのです。

そのことは 2 節にも繰り返され、強調されています。この福音書が書かれた紀元 1 世紀の後半に、キリストは永遠のお方ではないとの間違った教えがすでに出てきていました。それに対してヨハネは反論して、「この方は、初めに神とともにおられた」と繰り返して強調し、キリストが永遠のお方であることを教えました。イエス・キリストは永遠の神であり、そのお方が人となりました。キリストが「神とともに」おられなかったことは、一瞬たりともなかったのです。

父なる神とそのひとり子の神イエスは、「初めに…ともにおられ」、常にともにおられます。ここに、聖書が教えている真理の中で最も深く、最も神秘的な真理の一つが示されています。この御父と御子との間の結びつきについて、私たちは理解し尽くすことはできないでしょう。聖書に示されていることをその通りに信じるのが幸いです。主イエスはご自身が父なる神と一つであることを繰り返しお語りになりました。この福音書の中にも、(10 : 30)「わたしと父とは一つです」、(14 : 9)「わたしを見た人は、父を見たのです」、(14 : 10)「わたしが父のうちにいて、父がわたしのうちにおられる」、などのイエスのことばが記されています。御父と御子イエスは区別されています。しかし、御父と御子は一つです。そして、御子は永遠において御父とともにおられますが、人となってこの世に来られました。地上におられた時も、御子イエスは父なる神と一つでした。

そして、このことが御子イエスのことを「ことば」とヨハネが言った一つの理由でしょう。それは、イエスが神のことを伝える「ことば」なる方であるということです。

18 節。「ひとり子の神が、神を説き明かされた」のです。イエス・キリストは父なる神について人々に多くのことをお語りになりました。また、イエスの人々に対する態度やなされた御業によって、人に対する神の豊かな愛を表し、神の偉大な力を示し、人に与えてくださる救いについて教えてくださいました。見えない神を主

イエスが見えるように表してくださいました。そして、その頂点は十字架上の死と三日目のよみがえりです。主イエスのすべてによって、神の御性質が、神のみこころが、神が与えてくださる救いのことが、人々に完全に伝えられたのです。そのような意味で「ことば」なるお方なのです。

ですから、私たちが神のことを知りたいと思うなら、主イエスを見れば良いのです。「ことば」なる方に聞けば良いのです。聖書によって、神はご自身を完全に啓示しておられます。心を開いて、みことばを聞くなら、神はお語りくださいます。

## 2. いのちを与える方（：3～5）

この「ことば」なる方は、初めからおられ、父なる神とともにおられた神であり、そして、ともに天地を創造されました。3節。この節は、天地万物の創造は父なる神の御業であり、それと同じように御子キリストの御業であったと言っています。「万物は御子によって造られ」（コロサイ1：16）たともあります。神の他の御業と同じように、創造においても「ことば」なる方は御父とともに働かれたということです。

神は何もないところからことばによって万物を創造されました。創世記に「神は仰せられた。『光、あれ。』すると光があった」（1：3）と記されている通りです。このことに、ヨハネがキリストを「ことば」と表現したもう一つの理由があると思います。

いのちもこの方によって与えられたのです。4節。「ことば」なる方、神の御子、キリストこそいのちの源であると言います。二つの意味でそう言えます。一つは、キリストは、御父とともに創造主であり、生命のあるものは、キリストによっていのちを与えられたということです。

もう一つの意味は、初めの天地創造だけでなく、新しい創造のいのちもキリストによって与えられるということです。それは救いのことです。キリストの十字架とよみがえりによって、新しいいのち、永遠のいのちが、信じる者たちに与えられます。その意味でも「この方にはいのちがあった」のです。

「このいのちは人の光であった」。キリストのうちにあるいのち、キリストによって与えられるいのちは、「人の光」と言われます。光があることで、人は多くの恵みを受けます。光があることで、周りを見ることができます。安心します。目標や希望を持つことができます。そのような恵みをキリストによって与えられるのです。

そして、そのような光の恵みは暗闇の中でこそ明らかにになります。5節。この世を覆っている様々な闇、また私たちのそれぞれの心のうちにある闇の中に、キリストによって光が輝きます。

昔も今も、イエス・キリストに対する敵意、不信仰、無関心などの罪の闇があります。また、その結果である死の闇があります。闇は人々の心の中にあり、この世を覆っています。しかし、いのちの源であり、人の光であるキリストは輝いています。罪と死の闇はイエスを滅ぼすことはできませんでした。主イエスは死からよみがえり、永遠に生きておられます。今、闇の中にある人もイエス・キリストによって光を照らされます。キリストの光によって人は自分自身の内面を見ることができます。自分の内に相反するものがあることに気づきます。善を行う力と悪への傾向、希望と絶望、敬虔さと不信仰という矛盾するものがあるのを見ます。

しかし、闇は光に打ち勝つことはできません。人が光によって照らされるとき、自分の罪を認めて、まことの光に向かい、悔い改めるように導かれます。そして、ことばなる方を信じて、いのちをいただくことができます。神の御子イエス・キリストを信じて救いを与えられるのです。

救い主イエスは言われました。「わたしは光として世に来ました。わたしを信じる者が、だれも闇の中にとどまることのないようにするためです」（ヨハネ12：46）。

私たちの周りに、また私たち自身の内に、様々な闇が覆うことがあります。しかし、「光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった」のです。「ことば」なるお方、永遠の神とともにある神の御子イエス・キリストによって神の愛を知らせていただけます。そして、イエス・キリストを信じるなら、キリストのうちにある永遠のいのちを与えられて、光を与えられて生きることができます。そして、光に照らされて、闇の中に輝く光によって、教えられ、導かれて、生きることができるのです。私たちを照らし、生かしてくださるイエス・キリストに感謝しましょう。